



TITLE:

まえがき

AUTHOR(S):

CITATION:

まえがき. アジア・キリスト教・多元性 2005, 3: i-ii

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57693>

RIGHT:

特集企画について

第19回国際宗教学宗教史会議世界大会が、2005年3月24日から30日の日程で、東京の高輪プリンスホテルを会場に開催される。大会の総合テーマは、「宗教 相克と平和」であるが、本研究会からも、「東アジアの宗教状況と社会正義 - 日韓の無教会キリスト教を中心に - 」というテーマでパネル（3月29日（火）午後4時30分～6時30分）を実施することになった。そこで、『アジア・キリスト教・多元性』第3号は、このパネルの特集号として企画し、研究会における共同研究成果の一端を公にすることになった。この特集号は、当日の口頭発表を論文化したものであり、口頭発表と並行して執筆された。そのため、パネルにおける討論については収録されていない点をお断りしておきたい。

このパネルは、芦名定道をコンヴィーナー・司会者とし、岩野祐介、金文吉、今滝憲雄、朴賢淑の4人のパネリストと、狭間芳樹、金承哲の2人のディスカッサントによって構成されている。パネルの趣旨は以下の通りである。

古来より、宗教は社会との密接な相互関係の中に存在してきた。この状況は現代においても基本的には同様であって、たとえば現代において宗教の存在意味を評価する場合、その評価基準の一つとして、それが社会の中でいかなる責任を負っているのか、社会正義の実現にいかなる貢献を行っているのかという観点を挙げることも不可能ではない。これは東アジアの宗教状況を考える際にも妥当する。本パネルでは、東アジアの宗教を社会正義との関わりから論じることを目指しているが、問題を明確化するために、とくに日本と韓国の無教会キリスト教に絞って議論が行われる。日韓の無教会キリスト教は、思想的あるいは実践的に、社会正義の実現に積極的に関与してきた歴史を有しており、東アジアの宗教を社会との関わりで理解する際の典型的で貴重な事例として位置づけることができる。各パネラーは、それぞれの視点より発表を行うが、パネル全体としては、無教会キリスト教と社会正義との関わりの歴史と未来の可能性とを明らかにすることを目指している。

岩野祐介

金文吉

今滝憲雄

朴賢淑

